

高専シンポジウム 20 回までの軌跡

高専シンポジウム創設者 鳥井昭美 (久留米高専名誉教授)

It is 50 years since a new system of higher learning *Kosen* or the national colleges of technology has been introduced in Japan, and the system now faces a turning point in its history. During the past years and presently, a social need for this new system has been clearly recognized and firmly established through the continuous efforts of the faculties, students, and graduates.

However, looking back upon the past path, this growth process has not been a smooth one. It took a long time to set up a place of mutual communication among *Kosen* members to further develop this new educational system by checking and exchanging various research outcomes at *Kosen*.

In such a historical background, “the *Kosen* Forum of the Kyushu-Okinawa Region,” which was established to return the benefits of research outcomes created at *Kosen* to local communities, faces its 24rd anniversary this year. Another conference of similar nature entitled “The *Kosen* Symposium” is about to celebrate its 20th anniversary.

The author believes that reviewing the past locus of the *Kosen* system and looking toward its future will be a good reference to further progress the relationships between *Kosen* and its surroundings such as local companies, governments, and citizens. It is with this belief that the author presents this article to all of those who are concerned with *Kosen*.

1. はじめに

昭和 37 年に創設された高等専門学校(高専)が、今や 50 周年を迎えようとしている。その間、高専は幾多の困難な道のりを乗り越えてきた。つまり、高専とは如何なる高等教育機関なのか、それは単に高等学校 3 年間に短期大学の 2 年間を加えての 5 年間の教育機関ではないのか。

色々な批判を受けたが、開校した当初の入学の競争率は二十数倍で難関中の難関だった。

しかし、短大や大学からは余り快く思われて居なかった。簡単に言えば「短大の領分を奪う」と言う事。中学から優秀な生徒が高専を受験するので、地域の進学校と称する高校からは「まだ、年齢も若い中学生の段階で将来を決めてしまうのはひどすぎる」等々の危機感が主だった。

ところで、入学して来る学生は確かに素晴らしかった。現在では想像も出来ないが当初は大学編入学・専攻科入学等の道は無く、卒業生の就職に際しても企業の理解度は低く、社会的にも認められず、高等教育機関として認知されるために当時の教職員の努力は筆舌に尽くせぬ感があった。しかし、其の評価を高めてくれたのは中学卒業後 5 年間高専で学び研鑽を積んで、巣立っていった卒業生のたゆまぬ努力によるものであり、その結果、教育界や産業界を含めて各界から注

目され地域にも高評価を得る事となった。

一方、現在はその卒業生から今の高専の先生は余りにも多くの雑務の中に置かれ、高専独自の個性的な研究や教育の方向性を見失って居る様に思えるとの指摘を受けた。

独立法人化した個々の大学は独自のビジョンを持ち、教育や研究に対応している。しかし、高専の場合、高専機構が全ての高専を統治し管理している。その結果、かつての独創的で個性的に地域に密着して居た高専の面影が薄れ、画一化され高専独自の魅力が失われつつあるとの見解である。この意見は高専が50周年の歴史を刻んできた中での、卒業生諸君の感想の一つでも有る事から、我々も真摯に受け止めねばならない。その様な状況の中で、高専の教員と学生達が独創的なアイデアで築いてきたものがある。それは学生と教員の研究・教育の交流並びに親睦の場として生まれた「九州沖縄地区高専フォーラム」と「高専シンポジウム」である。

現在、「九州沖縄地区高専フォーラム」は24回目が今年度有明高専で開催される事になっている。まさに“継続は宝なり”である。更に、「九州沖縄地区高専フォーラム」から全国的な規模に発展した「高専シンポジウム」は大震災で被害に遭った仙台高専で18回目が開催され、19回目を「高専シンポジウム」発祥の地である久留米高専で3度目の「高専シンポジウム」を開催し、本年度の記念すべき第20回高専シンポジウムが函館高専で開催されるに到った。何れも、回を重ねる毎に、高専の学生・教員の研究発表の場としてだけではなく、高専を理解してもらうためのアイデアを出し合い検討し、地域との連携を色々な形で計画し、その活性化に充分応えられるようになって来た。さらに、地域の高等教育機関、初等中等教育機関、企業、行政との関わりも、回を追う毎に充実し、特質すべきは、市民の参加により、市民レベルで高専の立ち位置を理解してくれている事である。高専フォーラム・高専シンポジウム共に当初から国・地方からの金銭的な援助は受けず、原則、高専の教職員・学生達の、所謂、手弁当によって開催をしてきた。

近年、開催の意義が認められ、企業や地方自治体の理解により、会場の無償提供等の多くの協力が得られるに至ったのは、高専の熱意ある教職員の努力の賜物である。

2. 高専と産・学・官・との連携に向けての試み

近年、文部科学省から初等中等教育および高等教育全般にわたって将来の目標を定める指標の一つとして、「キャリア教育」が提唱されている。其の源流を辿れば、かつて、文部省が高等教育機関に対して「リフレッシュ教育」を推進した延長線上にあるものと考えられる。

即ち、生涯学習を通して、意義ある教育研究の多様化・活性化を図る事が社会的責務であるとの目標を持たせる事であった。つまり、「高専シンポジウム」・「九州沖縄地区高専フォーラム」の開催は工科系の高等教育機関における産・学・官の意義ある連携手法であり、其々の技術を地域の活性化に還元すべしとの「リフレッシュ教育」の理念にもマッチングしていた。

従って、当時の文部省の専門教育課並びに生涯教育課の御指導と適切なアドバイスを得た事が大きな推進力となった。先ず、「九州沖縄地区高専フォーラム」並びに「高専シンポジウム」の開催に際しての目的並びに位置付けについて、其々の会則の中から抜粋する。つまり、何れも、参加並びに開催する高等専門学校の各地域における特色とPR活動を行うと共に、高専教育に関する学術研究等の普及に努め、地域産業、行政、教育機関並びに市民との連携を密にすることを

目的した。現在、開催に際しては開催校からも協議会の理事に加わっていただき、其々の理事会において、次の様な項目で熱心な議論の上、毎年、開催されている。

- (1) 学生並びに教職員の研究発表を含む相互交流を行う。
- (2) 高専間の情報交換と相互支援並びに懇親を行う。
- (3) 高専の教育・研究に関するシーズを地域に還元する事業を行う。
- (4) 地域行政、企業、高等教育機関、公的研究機関との研究を通じた交流を行う。
- (5) 初等中等教育機関並びに市民への高専の広報活動を行う。

運営に関して

- (1) 協議会は、次の役員で構成する。
会長、副会長、名誉会長、顧問、運営委員長、理事、相談役、名誉会員
- (2) 開催校校長を相談役とする。
- (3) 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
- (4) 理事は、会長の命を受け、会務を遂行する。
- (5) 相談役は、会長ほか役員の要請により会務について意見を述べ、フォーラムやシンポジウムの発展に寄与する。
- (6) 名誉会員は、協議会が推挙する。

細部については省略するが、概略、上述の様な方針で前年度並びに本年度開催校による事業報告を理事会で行い、反省すべき点は大いに反省し、更なる発展を目指し、“学生のために”を合言葉に次期開催校の決定や表彰者に関しても論議してきた。当初、「九州沖縄地区高専フォーラム」並びに「高専シンポジウム」は得体の知れない団体というレッテルを貼られ、開催に際して開催高専の校長に何度その目的を説明しても趣旨を認めてもらえず、開催高専の理事は大変な御苦勞をされた。概して、フロンティアとしての宿命は当然覚悟していたが、地域の企業・行政・市民・保護者の温かいエールや、上述した当時の文部省（当時）の専門教育課並びに生涯学習振興課の御助言により続けて来られた訳である。従って、上述の会則等の作成はかなりの開催経験を積んでからのものである。

3. 【九州沖縄地区高専フォーラム】の歩み

第1～3回は久留米高専で開催し、以降は輪番制として開催してきたが、フォーラムを開催するに至った経緯を簡単に述べる。それは、久留米高専学内の連携を取る事を目的とした「科学教育セミナー」から始まった。つまり、基礎科目を講義される一般科目の文科・理科の先生方と機械・電気・情報・材料・工業化学等の専門学科の授業内容についての検討会からである。



第1回「科学教育セミナー」会場

基礎科目を担当される先生方に各専門学科から、講義内容についての希望と意見を出し各専門

学科の教員から、‘きたん’のない意見を提出し、例えば、各専門学科の違いにより数学では微分積分を低学年から・工業英語とドイツ語の読解力のマスターを早めに、等々であった。初めは、内政干渉とも受け取られる内容でもあり、意思の疎通を欠くことにもなった。しかし、回を重ねるうちに、専門学科毎に、必要としている授業内容について所謂、一般教養学科の先生方に理解してもらった結果となった。高専では当時、大学受験を経験しないため、一般的に数学・英語は大学卒と比較し実力の差があると認識されていた。そこで、数学・英語担当の先生方は学生にいかにして実力をつけるか、努力し、創意工夫をしていた折でもあったが専門学科毎の意見を聞いて下さり、中には、御多忙なのにもかかわらず補修授業で実力をつけて下さった。

また、文科系の教員から「科学教育セミナー」を通じて、国語の成績が良い学生ほど発明・発見能力が勝っている等の指摘もあり、数多くの有益な事が分かり、教育・研究に向けての専門学科間の連携にも影響を与えた。また、これら「科学教育セミナー」の経緯は、後に、「九州沖縄地区高専フォーラム」に参加した教官からの提案で、高専独自の教科書を作成する‘きっかけ’ともなった。さらに、学内での「科学教育セミナー」を開催していた折、他高専ではどのような取り組みがなされているのか参考にしたいとの意見が先生方から出された。

その結果、「久留米高専フォーラム」を開催する事とした。目的は「科学教育セミナー」と共通した“学生のために”をモットーとしての開催であった。

従来、高専間の学生の交流の場としては全国高専体育大会があるが、研究・教育の成果を発表する場はなかった。つまり、大学と同じく研究の成果は、各専門分野での学会発表に頼っており、高専独自の学生・教員による研究発表の場が全く無かった訳である。

現在、NHKでロボットコンテストが開催され、高専の良き宣伝となっており、有難く、感謝している。一方、地味ながら「久留米高専フォーラム」は「九州地区高専フォーラム」へ発展し、九州地区の高専の有志教員により構成される「九州地区高専フォーラム協議会」が組織され、開



第3回 高専フォーラム会場風景

催校の理解と協力を得て毎年開催されており、教職員の意義ある情報交換の場となり、高専間の共同研究のきっかけともなっている。その結果は、表1に示した。表1には紙面の関係で開催のテーマだけしか掲載できなかったが、その内容は多岐にわたっており、地域企業・行政・高等教育機関・研究機関との連携についても取り組み、‘高専とは何か’を地域の方々にも認識していただいた。

表 1 九州沖縄地区高専フォーラムの歩み

九州沖縄地区高専フォーラムのテーマと【開催高専】
1. 平成 3 年「分り易いハイテク最前線」【久留米】
2. 平成 4 年「液晶と触媒化学に関する最近の話題」【久留米】
3. 平成 6 年「有機合 3 成アラカルト」【久留米】
4. 平成 7 年「高専教育に関する企業からの提言」【北九州】
5. 平成 8 年「地場産業と最先端技術」【都城】
6. 平成 9 年「企業と高専を取り巻く諸問題」【有明】
7. 平成 10 年 3 月「高専教育と最先端技術」【佐世保】
8. 平成 10 年 12 月「地球にやさしい科学技術と高専教育」【八代】
9. 平成 11 年「社会福祉を生涯教育から見つめて！」「今！高専は・そのハイテク技術を問う！」【久留米】
10. 平成 12 年「地域に根ざす高専を目指して」【熊本電波】
11. 平成 13 年「高専における産学連携」【北九州】
12. 平成 14 年「地域連携と環境ビジネス」【大分】
13. 平成 15 年「都城高専の地域連携を目指す取り組み」【都城】
14. 平成 16 年「独法化元年—高専の新たな取り組み」【鹿児島】
15. 平成 17 年「高専教育の問題点と改善への取り組み」【有明】
16. 平成 18 年「小中学校の理科教育への高専からの支援」【佐世保】
17. 平成 19 年「高専と地域社会との共同教育による人材育成」【八代】
18. 平成 20 年「久留米高専のアクションプラン…地域産業と市民との連携…」【久留米】
19. 平成 21 年「高専における産学官連携による人材育成」【北九州】
20. 平成 22 年「地域の天然資源を活用した産学連携」【沖縄】
21. 平成 23 年「再生日本に向けた高専からのアプローチ」【大分】
22. 平成 24 年「持続可能社会・九州—地方の未来をデザインする」【都城】
23. 平成 25 年「高専設立 50 周年—高専のグローバルな取り組み」【鹿児島】
24. 平成 26 年「準備中」【有明高専】

平成 16 年沖縄高専が設立され「九州地区高専フォーラム」も「九州沖縄地区高専フォーラム」と改め、平成 22 年には、記念すべき「20 周年記念九州沖縄地区高専フォーラム」が沖縄高専で開催された。勿論、個々の開催校の開催内容についても説明したいが、代表例として、沖縄高専での開催内容の概略を紹介させていただく事とする。

フォーラム終了後、理事会が開催され、次回開催校等についての確認や今後の「九州沖縄地区高専フォーラム」のあり方についても検討され、閉幕した。今後は、更なる発展を目指して「九州沖縄地区高専フォーラム協議会」で TPO に即した方向性を見出し展開して行くものと期待される。

また、九州沖縄地区高専フォーラム理事会で20周年記念誌の作成に関して検討し、20回までの経緯を踏まえて更なる発展を期待し御批判を頂く為のアンケートをお願いし閉幕した。アンケート内容は高専シンポジウムに関しても共通する指摘が多いと考えられるので九州沖縄地区高専フォーラムの個々の取り組みについても触れているので、各高専に配布した九州沖縄地区高専フォーラム20周年記念誌を御覧頂きたいが、特徴的な事項を簡単に述べる。

テーマ 地域の天然資源を活用した産学連携

開会挨拶：九州沖縄地区高専フォーラム協議会会長

久留米高専校長 上田 孝

開催校校長 沖縄高専 伊東 繁

名護市長 稲嶺 進

浦添市長 儀間光男

特別講演：「九州沖縄地区高専フォーラムの軌跡と展望」

九州沖縄地区高専フォーラム協議会名誉会長

鳥井昭美

基調講演：「天然資源ライブラリーによるベンチャー企業創設」

オーピーバイオファクトリー（株）代表

取締役社長 金本昭彦

パネルディスカッション：

「沖縄天然資源利用の活用方法（再利用）について」

～（総司会 沖縄高専 池松真也教授）～

和田浩二（琉球大学教授）

市場俊雄（沖縄県工業技術センター）

金本昭彦 オーピーバイオファクトリー（代表取締役社長）

比嘉雅貴（「道の駅 許田駅長」）

大竹孝明（鹿児島高専教授）

中嶋裕之（久留米高専教授）

山城秀之（沖縄高専教授）の皆さんが、パネリストとして多数の参加者と共に活発な討論をされた。



会場風景



現在、[九州沖縄地区高専フォーラム]・「高専シンポジウム」開催後、二十数年が経過したが、それが良い意味の刺激となって、その間、色々な高専関係者による研究会が全国的に立ち上げられている。つまり、[九州沖縄地区高専フォーラム]・「高専シンポジウム」より後に、創設された九州沖縄地区テクノセンター長会議：九州沖縄科学技術教育支援会議WG：全国高専教育フォーラ

ム：等々が林立状態とか。其の他にも色々なWGが創設されているとの報告があった。勿論、高専の活性化の為に色々な試みがなされる事に反対ではないが、高専の学生や教員の研究発表による為のものと、機構が教員養成研修の為に実施するものとは本質的に分ける必要が有ると考える。

今や高専機構は県・市町村の教育委員会的存在で、現場を統括する為の機関であると断言する先生も居るほどだ。私が「九州沖縄地区高専フォーラム」や「高専シンポジウム」を創設した折と現在は状況がかなり異なる様に思われる。

従って、アンケートを実施して良かったと思う反面、上述の様な現象が事実であれば、残念と言わざるをえない。

何分、私が現役の時には高専機構は存在せず、過渡期的には色々な事象が起り得ると思うが、今後とも高専の教育・研究の発展の為に御尽力いただきたい。



九州沖縄地区高専フォーラム 20周年記念誌



第20回九州沖縄地区高専フォーラム

4. 【九州沖縄地区高専フォーラム】から全国規模の【高専シンポジウム】へ

「九州地区高専フォーラム」を開催して間も無く、学生・教官の研究発表を通じての交流に是非参加したい旨の希望が、九州地区以外の高専からの希望が入りだした。しかしながら、九州地区でさえ未だ高専フォーラムの開催趣旨が理解されていない折りでも有り、その実情を説明して、お断わりをしていた。つまり、幾ら“学生の研究発表と交流の場”と説明しても、当時は九州地区の高専でもフォーラムに参加する事さえ、許可しない高専もあり、ましてや、九州以外の地域の高専が参加する事は、かなりの困難が伴うだろうと判断しての事であった。

それでも、‘学生のために参加したい’との申し出が多く、特に、関西以西の高専からの参加希望が多かった。そのため、九州地区高専フォーラムに参加していた高専の先生方（当時、沖縄高専は未設置）と検討した結果、交通費も宿泊費も自費である事や任意団体である事を理解した上での、参加である事を御理解頂き九州以外の地域の高専の参加に踏み切った。

即ち「第1回西日本地区高専シンポジウム」として久留米高専が主幹校となり「第5回九州地

区高専フォーラム」(都城高専主催)と並行して開催した。

「西日本地区高専シンポジウム」について、その概要を簡単に触れると、主として関西以西の高専から15校の参加があり、講演数は当時としては思いもよらぬ68件であった。

既に、1回~3回まで久留米高専で開催した「九州地区高専フォーラム」を通じて、久留米市が九州地区高専と地域企業等の連携に注目し、また、久留米市の学園都市構想の発想にもマッチングすることで、規模の大きい久留米リサーチパークを会場として、提供していただいた。

参加した高専の教職員並びに学生の講演と質疑応答には十分な施設の確保ができ、プログラムも十分な内容で余裕を持って進行できた。その甲斐あって高専の学生と教員の発表内容がハイテク・ローテクを問わず地域の活性化と連携に効果があるとの認識から、今後の展開に地方自治体としても注目したいと久留米市長自らが評価して下さった。また、参加した高専間では研究の情報交換が出来、新たな共同研究のテーマが数多く生まれた。

第1回目でもあり、今後の参考にもされる事から、スタッフはかなり緊張もしたが、参加人数約500名の第1回の「西日本地区高専シンポジウム」は無事終了した。テーマを「考えよう！地球環境とリサイクル技術」として7件の特別講演を含め、各会場で学生と教官の発表並びに質疑・応答が活発になされ、特に、緊張して発表していた学生達の姿が印象的で、後のシンポジウムの良き例となるとの評価を得た。

勿論、久留米市の教育委員会・観光課を初め、商工会議所・各種企業の参加もあり、参加した高専の教職員達も“やれば、出来る”と感じたのか、シンポジウム終了後、参加高専教員全員の意思で直ちに討論会が開催され、「西日本地区高専シンポジウム」を「高専シンポジウム」に改め、高専シンポジウム協議会が結成された。

表2には、第1回から第17回までの参加校数と、その講演回数をまとめている。

其の後、開催した其々の担当高専による「高専シンポジウム」の開催趣旨はフォーラムと同様で、学生と教員の研究発表が主体で有り、地域企業・行政・高等教育機関・研究機関からの発表・特別講演等もあり、一見「九州沖縄地区高専フォーラム」の拡大したものに思える。

しかし、全国の高専からの参加であることから、開催担当高専の努力と苦労は筆舌に尽くしがたいものであった。

表2に示した様に、第1回の久留米高専に始まり、第7回の和歌山高専までは、予測した通り、学校側の開催許可を得る事も難しく、「九州沖縄地区高専フォーラム」同様に開催高専の許可を得て開催にこぎつけるまでには大変な苦労を強いられた。

純粹に高専の研究成果の発表を通じての“高専の今！を知ってもらおう！”との切望からだったが、先生方が学生を思う気持ちの一つにして頑張ったお陰で「第2回高専シンポジウム」以降は関西以西のみならず、回を追う毎に、参加校数も増え、北海道から九州まで全国的な規模となった。各開催高専の模様を述べる事は今後の高専の発展と改革に大きなサゼッションとなる事は明らかである。しかしながら、紙面の関係で、割愛させて頂き、詳しくは九州沖縄地区高専フォーラム20周年記念誌と同じく作成されるで、あろう高専シンポジウム20周年記念誌に委ねるとして、2,3の特徴的な高専シンポジウムを紹介して置く。

表.2 第1回～第19回までの 回数：開催年：開催校：表件数（参加校数）	
1回.	平成 8 年 久留米高専 65件（15校）
2回.	平成 9 年 宇部高専 82件（11 校）
3回.	平成10 年 米子高専 84件（14 校）
4回.	平成11 年 鈴鹿高専 98件（21 校）
5回.	平成12 年 福井高専 127 件（25 校）
6回.	平成13 年 東京高専 110 件（20 校）
7回.	平成14 年 和歌山高専 150 件（25 校）
8回.	平成15 年 新居浜高専 120 件（21 校）
9回.	平成16 年 有明高専 190 件（31 校）
10回.	平成17 年 鶴岡高専 135 件（33 校）
11回.	平成18 年 長岡高専 175 件（30 校）
12回.	平成19 年 沼津高専 212 件（33 校）
13回.	平成20 年 久留米高専 295 件（36 校）
14回.	平成21 年 高知高専 325 件（46 校）
15回.	平成22 年 福島高専 301 件（34 校）
16回.	平成23 年 米子高専 389 件（44 校）
17回.	平成 24 年 熊本高専 389 件（46 校）
18回.	平成 25 年 仙台高専 395 件（47 校）
19回.	平成 26 年 久留米高専 495 件（47 校）
20回.	平成 27 年 函館高専 準備中

第 9 回から、「高専シンポジウム」もやっとオーソライズされ軌道に乗り始めた。つまり、高専の有志教員により運営されてきている「高専シンポジウム協議会」の会長を高専の校長が引き受けてくれたのである。

当時福井高専の生越久靖校長が引き受けられ、その際、高専の為として設立された長岡及び豊橋技術科学大学との連携にも対応していただいた。現在は久留米高専の上田孝校長が6代目の会長である。開催校の校長は相談役として「高専シンポジウム」の発展に尽力していただいている。

5 代目会長の前田三男会長（当時の久留米高専校長）の折には、平成 20 年に第 13 回高専シンポジウムを 2 日間に亘る規模で開催し、高専機構の河村潤子理事の「高専の今日と明日」並びに立命館大学の本間政雄副学長の「世界の中の日本の高等教育」の特別講演等も行われ、参加高専数は 36 校、参加大学 12 校、参加企業 21 社、公設試験研究機関等の発表 福岡県産物の展示・進学相談・特許研究相談・ロボットコンテストによる市民参加、等々石橋文化センターの施設全てを久留米市並びに商工会議所の援助により会場とし、高専間は勿論、上述した様に行政・企業・大学等との

連携を密にし、前例の無い 2 日間にわたる色々な面で地域の活性化に尽力した。

其の後の「高専シンポジウム」の開催に際しては表 2 に示したように、講演件数はうなぎ登りであり、発表分野は化学・電気・情報・生物・土木建築・材料・物質・電子・通信・工学教育等と多岐にわたり発展した。

表 2 の第 17 回高専シンポジウムでは理事会で検討討議した結果 TP0 にマッチングした対応をする為に“合併高専（スーパー高専）の活性化をビジョンとした。

そこで、熊本高専（八代高専と熊本電波高専の合併校）での「第 17 回高専シンポジウム in 熊本」を計画したところ、熊本高専の大変な御努力で参加高専 46 校、講演件数は 389 件にのぼり、会場も、崇城大学市民ホールと熊本市国際交流会館の 2 会場での開催となった。

勿論、この様に、大規模なシンポジウムの開催に漕ぎ着けたのは、開催校の高専シンポジウム協議会理事を中心とした関係者の努力によるものである。

合併高専（スーパー高専）の高専シンポジウム開催による活性化の精神は其の後も続き、大震災に遭遇された仙台高専が開催され、表 2 の第 18 回高専シンポジウムで明らかな様に、困難な環

境の中にもかかわらず、47校の参加と395件の発表数は、仙台高専のまさに、血のにじむ御努力のおかげだった。後日談になり申し訳ないが、高専シンポジウム開催前に電話連絡したが通じなかった。そこで、失礼ながらメールで現状をお尋ねした結果、「今、5.5程度の地震があり、また、JRが不通になったので、今夜の学生達の夜食作りをしておりました。誠に、失礼しました。」「コンナ状態ですので御心配を御掛け致しますが“高専シンポジウム in 仙台”は開催致します。頑張ります」との御連絡を頂いた時の事が昨日の様に思い出される。



「第18回高専シンポジウム in 仙台」



「第20回高専シンポジウム in 函館」

さて、20周年記念の九州沖縄地区高専フォーラムが日本列島の南端の沖縄高専で、同じく20周年記念の第20回高専シンポジウムが日本列島北端の地北海道・函館高専で開催される事には因縁めいたものを感じる。

確かに、高専シンポジウムも九州沖縄地区高専フォーラムも発表件数が多くなったのは開催に際しての教職員と学生の努力による事は言うまでもないが、教員同士・学生同士の心の交流が一番大切だと思う。

競争心をあおる事なく自然体で対峙する事も今後の課題だと言えよう。

5. 高専卒業生がフォーラム・シンポジウムを通じて佐賀県の地域企業の活性化に尽力した事

佐賀県は、残念ながら、九州地区において、唯一高等専門学校が存在しない県である。過去、設立の試案はあったが、実現に至らなかった。

従って、佐賀県から他県の高専にかなりの学生が入学し、卒業して行った。佐賀県出身の学生達や佐賀県の地域支援センター関係者が「高専シンポジウム」「九州沖縄地区高専フォーラム」に参加して、研究発表の内容を知り、是非、佐賀県の技術者の育成のために、高専との技術交流を図りたいとの希望があり、(財)佐賀県地域産業支援センターとの共催で「科学技術セミナー」を開催するはこびとなった。

先ず、久留米市と佐賀県は隣接している事から、久留米高専と佐賀県の技術者の交流を図る事とし、表に示した様に、平成4年を皮切りに、平成12年まで9回にわたって開催した。その間

(財) 佐賀県地域産業支援センターの絶大なる御協力と熱意には、深く感銘を受けた。

佐賀県における科学技術セミナー 「ハイテクノロジーの現状」		
開催回数	開催日	テーマ・講演タイトル
第 1 回	平成 5 年 1 月 14 日	最新のバイオテクノロジーの開発と応用
第 2 回	平成 5 年 10 月 29 日	今！環境は問いかける！
第 3 回	平成 7 年 1 月 13 日	ハイテクノロジーの現状
第 4 回	平成 7 年 11 月 6 日	リサイクル技術の技術と展望
第 5 回	平成 8 年 10 月 25 日	ゴム・ガラス・繊維の技術革新
第 6 回	平成 9 年 9 月 19 日	新素材アラカルト 情報・液晶・フィルター・新薬開発
第 7 回	平成 10 年 9 月 4 日	極地から！深海から！地球環境への提言
第 8 回	平成 12 年 1 月 14 日	高専のハイテク技術-地域産業と技術革新を目指して
第 9 回	平成 12 年 11 月 24 日	介護と福祉機器

表に示した様に、「ハイテクノロジーの現状」をタイトルとして、TPO にマッチングしたサブタイトルで開催した。振り返ると、約 20 年前のスタートであったが、環境問題・リサイクル技術・介護技術・バイオテクノロジー等々、現在、問題として取り上げられているテーマに関する講演会であったことは興味深い。

其々の「科学技術セミナー」に共通している事は講演時間 1 時間で 3~4 講演を行い、質疑応答にかなりの時間を当てた。参加者はテーマに関連した佐賀県の若手技術者達で、そのテーマについて講演する講師は企業の幹部として活躍している高専の卒業生、高専の教員、企業の専門チーフマネージャー、大学教授・公的研究機関の皆さん方が熱弁を振るった。

実際に、第一線で活躍し、国内・外で評価を受けている実践的な技術の紹介であり、参加者からの質疑も多く、高専卒業生の成長と活躍に、(財) 佐賀県地域産業支援センターの専務理事をはじめ、佐賀県の企業関係者からも感謝された。また、懇親会での親睦も佐賀県内の関連企業の連携にも役立った、との評価を得、盛会裏に終了した。

6. まとめ

高専は設立から半世紀が過ぎ、それぞれ困難な道程を独自の理念を持ちつつ、地域に根ざした技術開発を目指し研究に励んで来た。高専 50 年が更なる発展のためのターニングポイントとするならば、其の創成期にまでさかのぼって考察し、今後の展望を考えるべきだと思う。

高等教育機関の中にあって、高専の教育・研究の展開について、紆余曲折は有ったにせよ、産業界から必要と認識されるに至った現在、高専の特質を活かした方向性を持つべきと考える。

グローバル化という言葉が、日本のあらゆる分野に飛び交っている現在、地味だと受けとめられがちだが、だからこそ原点に戻る事も重要だと考える。研究の展開にしても、其れを教育に活かすには“先生の背中を見て育つ”をモットーとしていた当時を思い出すべきだと思う。ややもすると、研究成果を無理に挙げようとする余り、無意識のうちに、教育を忘れがちとなっ

ている現状もある。確かに、予算獲得のための業績本位の研究に向かわざるを得ない環境の中に多くの先生方がおられる事は承知している。残念ながら、“学生のために”の教育面が欠落しがちである。

また、高専組織の経年変化における有り方が先生方の研究面への時間を奪い、専門教育に軸足をおくには、余りにも多忙だと思える。

かつてのゆとりを持って学生に研究の内容を認識させる、つまり、良く理解させ、卒業研究等においても、“君達とは共同研究者である”と理解させるには、時間が無さ過ぎるのが現状ではないだろうか。各界で活躍している卒業生や、最早、定年を向かえ、その熟練した技能や技術を、色々な形で、世の中に還元している卒業生からの提言に、“高専らしさ”が見られないとの厳しい指摘があった。

「九州沖縄地区高専フォーラム」や「高専シンポジウム」は、たかだか四分の一世紀ほどの経験しか持ち合わせていないが、携わった教職員達の熱心な“手作り”の温かみのある交流の中で、“学生のため”を考えている姿が感じられた、との感想も戴いた。

つまり、「九州沖縄地区高専フォーラム」・「高専シンポジウム」には本来の“独創的な高専らしさ”が有るとの指摘もあり、上述の様な貴重な意見が聞けたのは大きな収穫であった。今回、「九州沖縄地区高専フォーラム」・「高専シンポジウム」の延長線上から発展し、展開されたことの一例として、(財)佐賀県地域産業支援センターと共催した「科学技術セミナー」を挙げたが、現在、日本各地の高専が地域の連携と活性化を目指して専門分野毎に研究会等を開催し、これにより産学官民の貴重な連携の輪が広がっている事は誠に心強いかぎりである。

今後、「九州沖縄地区高専フォーラム」・「高専シンポジウム」の展開は時代のシーズとニーズにマッチングした方向性を持って、意義ある結果をもたらすものと信じている。高専開設50年のターニングポイントと同様、開催20年の節目を迎えている訳であるが、常に原点に立ち戻って、言い古された「温故知新」の精神で望んでいくことが大切である。最後に、「九州沖縄地区高専フォーラム」・「高専シンポジウム」の開催に際して、厳しくも、温かい御指導と御助言を長きにわたり戴いた、次の方々に深く感謝致します。

文部省専門教育課長：本間政雄氏*（現在：立命館アジア太平洋大学 [APU] 副学長：関東学院大学理事長）

文部省専門教育課長：西阪昇氏*（現在：京都大学副学長）

文部省生涯教育課長：樋口修資氏*（現在：明星大学教授）

京都大学教授・福井高専校長・国国立高等専門学校協会 会長（:ANCT） 生越久靖氏

独立行政法人国立高等専門学校初代高専機構理事長 林勇二郎氏。（現在：特別顧問）

独立行政法人国立高等専門学校現高専機構理事長 小畑秀文氏*

高専シンポジウム名誉会長（久留米高専校長）前田三男氏

現高専シンポジウム会長 九州沖縄地区高専フォーラム会長（久留米高専校長）上田孝氏

元九州沖縄地区高専フォーラム・元高専シンポジウム副会長久留米高専名誉教授 鎌田吉之助氏

九州沖縄地区高専フォーラム並びに高専シンポジウム副会長 久留米高専教授 馬越幹男氏
高専シンポジウム副会長 長岡高専教授 鈴木秋弘氏

*の方は当初の役職と現在の役職を記すのみで、審議官、局長等を歴任された事等は省略させて戴いた。

~~~~~

文献（報文等多数に付き、代表的なものに限定し、著者は共著としテーマ及び報文のみとする。）

### 1) リフレッシュ教育

- ・ 地域産業技術者のための高専におけるリフレッシュ教育「高専におけるリフレッシュ教育紹介Ⅲ」東京工業高等専門学校リフレッシュ教育研究会（平成5年3月）
- ・ 「高専の現状と展望」第83回佐賀ハイテク研究会（平成5年6月）
- ・ 久留米工業高等専門学校におけるリフレッシュ教育の試み 平成7年度工学教育研究会講演論文集（平成7年7月）

### 2) 高専フォーラム・九州沖縄地区高専フォーラム

- ・ 第1回久留米高専フォーラム「わかり易いハイテク最前線について」久留米工業高等専門学校紀要 第8巻1号（平成4年9月）
- ・ 第2回久留米高専フォーラム『液晶』と『触媒化学』に関する最近の話題“久留米工業高等専門学校紀要 第9巻1号（平成5年9月）
- ・ 第3回久留米高専フォーラム「有機合成アラカルト」日本化学会 九州支部 平成6年1月
- ・ 九州地区高専フォーラムの現状と展望 第6回高専フォーラム（有明高専 平成9年3月）及び工学・工業教育研究講演会講演論文集（平成9年8月）
- ・ 第20回九州沖縄地区高専フォーラムを終えて 化学と工業 第64巻第4号（平成23年4月）
- ・ 九州沖縄地区高専フォーラム20周年記念誌 九州沖縄地区高専フォーラム協議会編（平成24年3月）

### 3) 科学技術セミナー

- ・ 第1回科学技術セミナー「最近のバイオテクノロジーの開発と応用」久留米工業高等専門学校紀要 第8巻2号（平成5年3月）
- ・ 「ハイテクノロジーの現状「今、環境は問いかける」佐賀産業技術情報センター第2回科学技術セミナー（平成5年6月）
- ・ 第3回科学技術セミナー「ハイテクノロジーの現状」（財）佐賀産業技術情報センター（平成7年1月）久留米工業高等専門学校紀要 第11巻1号（平成7年9月）
- ・ 第4回科学技術セミナー「リサイクル技術の現状と展望」（財）佐賀産業技術情報セン

ター (平成7年11月)

- ・ 第5回科学技術セミナー「ハイテクノロジーの現状」 新素材の開発—ゴム・ガラス  
繊維— (平成8年10月): 久留米工業高等専門学校紀要 第13巻1号 (平成9年9  
月)
- ・ 第4回科学技術セミナー“リサイクル技術の現状と展望” 久留米工業高等専門学校紀  
要 第12巻2号 (平成9年3月)
- ・ 第6回科学技術セミナー“ハイテクノロジーの現状“新素材アラカルト—情報・液晶  
フィルター・新薬開発— (平成9年9月)

#### 4) 科学教育セミナー

- ・ 第2回科学教育セミナー久留米工業高専専門学校紀要 第10巻2号 (平成7年3月)
- ・ 第3回科学教育セミナー久留米工業高専専門学校紀要 第11巻2号 (平成8年3月)

#### 5) 高専シンポジウム

- ・ 第1回西日本地区高専シンポジウム討論会 (平成8年1月)
- ・ 西日本地区高専シンポジウムを企画して 平成8年度工学・工業教育研究講演会 講演  
論文集 (平成8年7月)
- ・ 第1回西日本地区高専シンポジウムを企画して 久留米工業高専専門学校紀要 第12  
巻1号 (平成8年9月)
- ・ 第2回高専シンポジウム企画 宇部高専 第2回高専シンポジウム企画 (平成9年1  
月)
- ・ 九州沖縄地区高専フォーラムから高専シンポジウムへ 化学と教育 第53巻第2号(平  
成17年2月)
- ・ 高専による地域産業及び市民との連携—「第13回高専シンポジウム in 久留米」を企画  
して 平成20年度工学・工業教育研究講演会 講演論文集 (平成20年8月)
- ・ 高専と地域産業・市民との連携—「第18回九州沖縄地区高専フォーラム」を企画して  
平成21年度工学・工業教育研究講演会 講演論文集 (平成21年8月)
- ・ 【九州沖縄地区高専フォーラム】からスタートして全国規模の【高専シンポジウム】へ  
と展開したアクションプラン 化学と工業 第65巻第4号 (平成24年4月)
- ・ 【委員長の招待席】: 高専学生による技術研究が『地域振興に活用された軌跡と展望』  
「化学と工業 第67巻第9号」(平成26年9月)

#### 新聞記事 (抜粋) 主たる記事のみ

朝日新聞: 平成11年11月11日 (木曜日) 朝刊

社会福祉テーマに高専フォーラム～明日から久留米高専で～

: 平成20年12月5日 (金曜日) 朝刊

高専生やOBの活躍知って～明日久留米で九州沖縄地区高専フォーラム～

日本経済新聞：平成20年1月19日 朝刊

高専シンポ26日から～発祥の久留米900人参加～

西日本新聞：平成18年1月12日 朝刊

開かれた高専めざし西日本の15校が交流～久留米で明日シンポ～

日刊工業新聞：平成8年6月9日

久留米高専は「久留米高専フォーラム」から「九州地区高専フォーラム」を開設し、久留米高専主催で「西日本地区高専シンポジウム」並びに「佐賀県産業技術センターと「化学教育セミナー」を共催し地域の活性化への尽力

文部科学教育通信 No. 216 2009-3-23 久留米高専 教務主事 馬越幹男

～久留米高専 基礎学力重視の技術者教育及び地域連携の取り組み～